

短期派遣 EUROPA 派遣報告書

リサーチフェロー 秋野有紀

2010年12月7日から11日の期間、TUFS-ITP-EUROPA 国際セミナーでの発表を行うため、イタリア・ボローニャに派遣していただきました。

2010年12月9日には、セミナーの第1日目（基調講演等）に出席したほか、本学受入教員でセミナーのディスカサントの山口裕之教授と事前の打ち合わせなどを行いました。

10日には、ボローニャ大学で「Die Politik der kulturellen Bildung in Frankfurt am Main seit 1970」（「フランクフルト・アム・マイン市の文化政策における1970年以降の文化的な教育に関する位置づけ」）という発表を行いました。

内容は以下のとおりです。

19世紀以降、分離してしまったといわれる「文化」と「社会」を再結合するために、1970年以降、フランクフルト・アム・マイン市の文化政策は「文化的な教育」を政策の要としました。その一環で、例えばミュージアムには「ミュージアム教育員」というポストを制度化していき、予算も増額されました。これまでのこうした政策実施の過程とそれを支えた政策理念を追いつつ、現在のドイツにおける文化政策の行き詰まりの理由を探ることが目的でした。

フランクフルト市のミュージアムを例に、先進的な教育普及プログラムを紹介し、また、政策を支えてきた「文化的な教育」という理念が「フェアミットルンク」に移行しつつあること、そこには、芸術を無批判に「よいもの」と見なし、専門家の言説を再生産する住民への批判がこめられていること、自ら芸術と自律的に対峙するために「フェアミットルンク」という手法が誕生したことなどを明らかにしました。

その上で、しかしながら政策理念の先進性に予算の配分が追いついていないという現状制度の問題点を指摘しました。

12日には日本で学会発表があったため、10日の午後に帰途につきました。

研究上の成果としては、博士論文を国際的なシンポジウムで発表するという有意義な機会となったことに加え、今回は口頭発表だったので、論文執筆とはまた異なる、プレゼンテーションの工夫、口頭発表向けのドイツ語の表現方法などの面で、改善をし、さらに今後に向けての課題が明らかになりました。